

中公文庫

夢の上

夜を統<sup>す</sup>べる王と六つの輝晶<sup>きしょう</sup> 1

多崎 礼

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。



目次

序幕

9

第一章 翠輝晶

14

幕間（一）

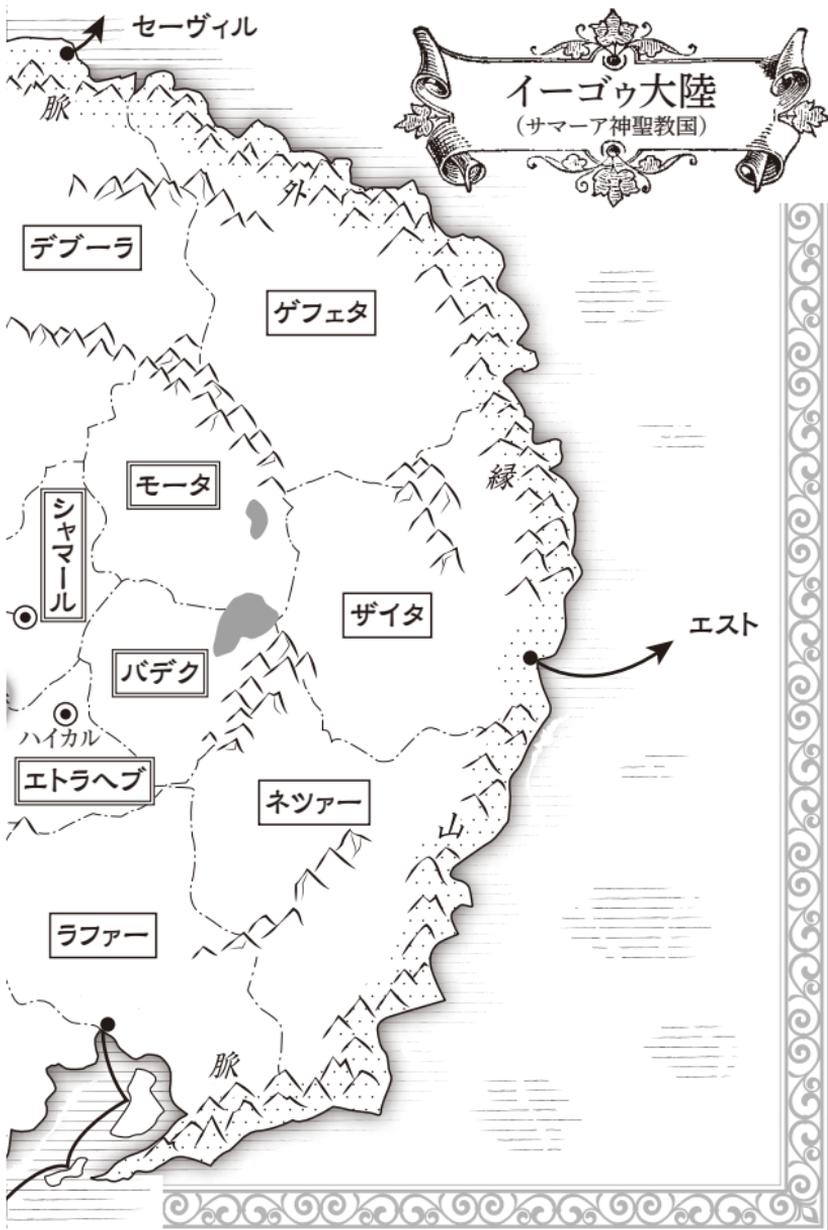
213

第二章 蒼輝晶

216

幕間（二）

372







夢の上  
夜を統<sup>す</sup>べる王と六つの輝<sup>き</sup>晶<sup>しょう</sup>  
1

金銀の光で織りあげて

刺繍を施した天上の布があれば、

夜と、光と、薄明りで作った

青と、薄墨いろと、黒いろの布があれば、

その布をあなたの足もとに広げたらうが。

だが貧しい私には夢しかない。

私はあなたの足もとに夢を広げた。

そっと歩いてくれ、私の夢の上を歩くのだから。

W・B・イエイツ 「彼は天の布を求める」

## 序幕

広間には夜が満ちていた。

石床の上に点々と青白い光が見える。あれは光木灯——輪切りにしたラルゴの幹に光茸を植えつけた明かりだ。

光木灯の淡い光の中、石造りの柱と古びた石壁が浮かび上がる。壁に食い込んだ矢尻。床に残る刀跡。これは戦の名残だ。かつて繰り広げられた戦いの記憶だ。

だが、それも今は静寂に包まれている。怒りも憤りも、胸を切り裂く慟哭もない。

すべては泡沫であつたかのように、広間は闇に微睡んでいる。

「——顔を上げよ」

静けさを破つて、声が響いた。

石の床に両膝をつき、頭を垂れていた男は、その命令に従い顔を上げた。

精緻な銀の細工で飾られた玉座。そこに座した人物は黒い縞子の下衣に、銀糸の刺繍が入った長衣を重ねていた。頭に戴いた銀の冠からは黒い薄衣が垂れ下がり、その顔を隠している。わずかに見えるのは、ほっそりとした白い顎と薄紅色の唇。静寂と闇を従えたその姿は、夜を統べる王と呼ぶに相応しい。

ひざまず  
跪いた男は目を伏せると、右手を胸に当てた。

「御拝謁の機会を得ましたこと、大変光栄に存じ——」

「堅苦しい挨拶は無用」

夜の王が遮った。

「お前は何者だ？」

単刀直入なその問いに、男は薄く笑った。

「私は『夢売り』にございます」

「夢売り？」

「はい」

男は頷き、王を見上げる。

「貴方様は『夢利き』をご存じでしょうか？」

記憶を探るようにはばし黙り込み、やがて王は首を横に振った。

「いや、聞き覚えはない」

「『夢利き』とは、『彩輝晶』に秘められし、人の夢を利く嗜みのことでございます」

「……人の夢を、利く？」

「いかにも」

夢売りは恭しく一礼する。

「『彩輝晶』は叶うことのなかった夢の結晶。その輝きは秘められし夢の輝き。だからこ

そ『彩輝晶』は鮮やかに美しく、人の心を引きつけるのでございます」

言いながら、側に置いた革袋を引き寄せる。

「『彩輝晶』に封じられし夢を、己が見た夢として再現するのが『夢利き』。そしてその手伝いをさせていただくのがこの私、『夢売り』でございます」

男は革袋の口紐を緩め、白い毛皮の包みを取り出す。

現れた宝玉は六つ。

硬質な表面に刻まれた鱗状の模様。睡蓮の蕾にも似た形状。それは時空晶の中でも、特に神秘的と謳い称される彩輝晶だった。氷のように透き通った蕾は、鼓動するかのごとく明滅を繰り返す。仄かな光が灯るたび、薄闇に淡やかな色彩が生まれる。

一つめは、若草萌ゆる春の野原のような翠輝晶。

二つめは、深い海のように暗く凍てついた蒼輝晶。

三つめは、炎のように激しく燦めく紅輝晶。

四つめは、蠟燭の光のように仄かに揺れる黄輝晶。

五つめは、真昼の太陽のように目映く輝く光輝晶。

そして最後には、暗夜を凝縮したような闇輝晶。

「こちらが貴方様の御為にご用意いたしました『彩輝晶』でございます」

そう言って、夢売りは慇懃に頭を垂れた。

「今宵はこれらが見せる夢を、お楽しみいただきますたく存じます」

王は氣怠げに右手を持ち上げた。

すらりとした白い指で、夢売りを指さす。

「それでお前は、見返りに何を求めようというのだ？」

顔を伏せたまま、夢売りは笑った。

嘲笑に近い、冷え冷えとした笑みだった。

「『夜明け』を所望いたします」

「夜明け？」

「はい」

「ならば……見せて貰おう」

夜の王は玉座に深く体を沈め、ため息のように囁いた。

「その『夢利き』とやらを」

「承知いたしました」

夢売りは足を組み替え、石床の上に胡座あぐらをかいた。両手を両膝の上に置き、背筋を伸ばす。目を閉じて深呼吸をする。充分に時をかけ、息を整えてから、再び臉まぶたを開く。

「人が生まれ落ちてから死ぬまでの間、専有し続ける時間と空間。その二つを合わせたものを『時空』と呼ぶ」

朗々とした口上。微睡んでいる王城を揺り起こすような夢売りの声。その不作法を咎とがめ立てすることもなく、夜の王は黙ってそれを聞いている。

「刻々と移りゆく現在を挟み、過ぎ去るのが過去、やって来るが未来。過去は可塑性かそせいを失

って記憶となり、未来はその自由を以て可能性と称される。この記憶と可能性が『時空』すなわち人を形作るもの。だが形だけでは器と同じ。『時空』だけでは虚無と同じ。そこに夢が宿ってこそ、人は初めて人間となる」

夢売りは石床に視線を落とした。そこには六色の彩輝晶が一行に並べられている。

「彩輝晶に込められた想い。それは誰にも知られず消えゆく運命。忘却の淵に沈みゆく運命。書にも残らず埋もれる運命。そのどれもが失われ、もう二度と、彼の元には戻らない」

夢売りは左端の彩輝晶を手を取った。それが発する淡い若緑色の光が、薄闇にほんやりと浮かび上がる。

「これは結晶化した女の『夢のような人生』」

そう言うと、両の掌で包んだ翠輝晶に、ふうつと息を吹きかけた。祈るように捧げ持った後、両手をびたりと合わせたまま前へと突き出す。

「それでは『夢利き』、始めさせていただきます」

両の手が、そつと開かれる。

掌の上の翠輝晶。固く結ばれていたその蕾が、ほろりと緩んだ。薄く鋭い花片が一枚一枚、ゆつくりとほじめていく。夢売りの手の上に、輝晶で出来た睡蓮の花が咲く。

その中心が淡い緑の光を放った。

土と若草の香りがふわりと漂う。

草原を駆け抜ける爽やかな風が吹く――

## 第一章 翠輝晶

幼い頃は、よく夢見たものです。

外縁山脈を越えて外つ国に行ってみたくとか。

『青空』に浮かぶ『太陽』を見てみたいとか。

誰でも一度は考ええる、

あどけない夢でございましょう？

外つ国とくにのことはマハル老に教わりました。

外縁山脈がいえんの向こうには内海ネキアがあって、それを越えると、このサマーア神聖教国とは別の国があるのだそうです。外つ国の上には青空がどこまでも広がり、白い雲が流れ、太陽の光が燦々さんさんと降り注いでいるのだとか。

ああ、誤解しておられる方も多いのですけれどもね。ナダルでも、太陽は見られないのでございませう。

私の故郷ナダル地方はツァピール領の北西部、まさしく外縁山脈ふちもとの麓に位置しております。が、このイーゴウ大陸の全土を覆うあの時空晶じくうしょうは、外縁山脈の山頂を越えた先まで続いてお

りますの。ですからナダルでもこのこと同じ。天に見えるのは灰色の巨大な時空晶だけなのでございます。

サマーア聖教会の司教様は、あの巨大な時空晶のことを『光神サマーア』とお呼びになります。

「光神サマーアは常に私達を見守っておられる。私達が信仰を忘れて墮落したならば、光神サマーアはこの地に落ちてきて、我らを滅ぼす」

そう司教様は仰います。

けれど私は子供の頃から、そのお話を信じてはおりませんでした。

ナダル地方は山脈に挟まれておりますので、雨も少なく、土地も痩せておりました。ナダルの先達は唯一の水源となるマブーア川の上流に堰を設け、長い年月をかけて灌漑施設を整えて参りました。

ですがナダルで穫れるのはトゥーバの実だけ。それさえも不作となった年は、それは悲惨なものでございました。父はなけなしの時空晶や備蓄食料を放出して領民達を救おうとなさいましたが、飢えた領民のすべてを救うことは出来ませんでした。小さな赤ん坊が母の胸に抱かれたまま死んでいくのを、私は幾度も見守って参りました。

でも、そんな風に飢え苦しむ領民達からも、サマーア聖教会は容赦なく税を取り立てていきます。

幼心に私は思いました。もし光神サマーアが常に私達を見守っていてくれるのなら、どうしても貧しい領民達を助けて下さらないのでしょうか。どうしても光神サマーアに奉仕する者達だけが

富を独占するのでしよう。これが神の御業みわざなのだとしたら、光神サマアは、なんて依怙えこひ巖い真まな神様なのでしょう。

とはいえ、それを口に出したりはいたしませんでした。サマア教の司教様に聞かれてもしたら、こっぴどく叱られることはわかっておりましたから。

そんな私ではございますが、一度だけ光神サマアへの信仰を取り戻そうと思ったことがございませぬ。

それはオープン様と、そのご家族に初めて出会った時のことでございました。

私の父カシート・ナダルは、ナダルの小領主を務めておりました。けれど領民達の苦勞を鑑かんみて、税をぎりぎりまで減へらしておりましたので、小領主と言えど贅沢ぜいたくは許されませんでした。貴族達が催すお茶会や晩餐会ばんさんかいに参加するなど夢のまた夢。食事は日に二回。それも雑穀を煮込んだシユールバと決まっております。

いえ、それを不満に思ったことなどございません。朝夕の食事でありついただけでも、私は恵まれておりました。私を育ててくれた父とナダルの領民達には、今でも感謝しております。

そのようにつましやかな暮らしをしておりましたから、十諸侯であるツァピール侯から縁談をいただきました時には、何かの間違まちがいだろうと思われました。ですが父が見せてくれた書状には「カシート・ナダルの一人娘アイナを、嫡男ちやくなんオープの伴侶はんりよとして当家に迎え入れたい」と確かに記してございました。

当時、私は十五歳。花も恥じらう乙女でございます。当然、生涯の伴侶となる殿方や将来の家庭には、ささやかな夢を抱いております。

私はナダルの地を愛しておりましたし、一人娘でもありましたから、家を出るつもりはございませんでした。ですからナダルに住む健康で働きの若者と結ばれ、ともに領地を守りながら毎日畑の手入れをし、真っ赤に色づいたトゥーバの実を収穫する。それが私の理想でございました。

やがては二人か三人の子を儲け、彼らを立派に育て上げましょう。彼らに家督を譲った後は、夫と二人、のんびりと外縁山脈を眺めましょう。晴れた日には窓辺に椅子を並べ、私が淹れたエブ茶を飲みながら、思い出話をするのもよいでしょう。そのようにしてささやかな幸せを噛みしめながら、いつまでも仲むつまじく、穏やかに年を重ねていく。

それが私の夢でした。

けれどお話をいただきましたオーブ様は、サマーア神聖教国の誉れ高き十諸侯のひとつ、ツァピール家の嫡男でいらっしゃいます。ゆくゆくはツァピール領主の家督をお継ぎになる方です。私よりも二つ年上の十七歳ですが、すでにツァピール騎士団に所属し、日夜剣の腕を磨いていらっしゃるご立派な方だと聞き及んでおりました。

降って湧いたこの縁談を、父は手放して喜びました。ですが私はただただ怖ろしくて、喜ぶどころではございませんでした。私にとってオーブ様は光神王にも等しい雲上人です。ツァピール家に嫁げば、私が夢見ていたような暮らしなど望むべくもありません。

なぜ私のような田舎娘にこのような縁談が降ってきたのでしょうか。これはきっと何かの冗談に違いありません。そんな疑惑がぐるぐると頭の中を回りました。

それでも小領主の娘がツァピール侯からの縁談を反故にすることなど出来るはずもございま

せん。とんとん拍子に準備は整い、ついに門出の日がやってきてしまいました。

母の墓に挨拶をし、涙ながらに父に別れを告げ、私は馬車に乗りました。二頭のラクシャ馬に繋がれた立派な白馬車。それはわずかな蓄えをはたいて、父が仕立ててくれたものでした。名残惜しそうに手を振る父と領民達に見送られながら、私は故郷の地ナダルを離れました。供をしてくれたのは、私が生まれた時からずっと面倒を見てくれる乳母のミーマルだけでした。

私とミーマルを乗せた馬車の後ろには、花嫁道具を積んだ荷馬車が一台続きます。十諸侯である名門ツァピール家に向かうには貧弱すぎる花嫁行列でしたが、ナダルの小領主にはこれが精一杯なのでした。

列の前後を守るのは「花嫁の護衛に」と、ツァピール侯が差し向けて下さった騎馬隊です。銀色の甲冑かっちゅうには雄山羊の紋章が輝いています。山岳機動において並ぶ者なしと謳うたわれるツァピール騎士団の紋章です。

「お嬢様、元氣を出して下さい」

道中、ミーマルは繰り返して私に言いました。

「ツァピール家の若様に見初みそめられるなんて、お嬢様にとってこれほど幸運なことはないのでございますよ。もっと花嫁らしく、喜びに満ちあふれたお顔をなさいませ」

返答に困って、私は馬車の外に目を向けました。

天を覆う灰色の時空晶。正午近い時刻のせいか、それは時折、キラキラと白い光を反射します。その下に広がるのは赤茶けた土地。ナダルのトゥーバ畑はもう見えません。寂しくて、心

細くて、胸がきゅんと痛みます。

「素晴らしいお天気ですわね」

そんな私の胸中を察することなく、ミーマルは額ひたいに二本指を当て、光神サマーアの印を切りました。

「光神サマーアも、お嬢様の輿こし入れを祝福して下さってるのでしょう」

私は灰色の時空晶を見上げました。

人々がその信仰を失った時、落ちてきて国を滅ぼすと言われる光神サマーア。そんな怖ろしい神様が、私のような不信心者を祝福してくれるはずがございません。暗澹あんたんとした気分のまま、私はそつとため息をつきました。

故郷を離れて三日ヤウム後、私とミーマルを乗せた馬車はエダムに到着しました。エダムはツァピール領で一番大きな町でございます。

そのエダムにあるツァピール侯のお屋敷は、私の生家の十倍はありそうな見事な石造りの建物でした。私達を出迎えに並んだ使用人の数も三十は下りません。想像以上の出来事に、私はすっかり緊張してしまいました。

「大丈夫です。お嬢様には光神サマーアがついておられます」  
私を激励するミーマルの声も緊張に震えています。

ですがそれを聞いて、逆に肝きもが据さまりました。貴族と名乗るのも憚はばかられるほど貧しい小領主ではありましたが、それでも私はナダルの娘です。私の恥はナダルの恥。臆おそしている場合では

「ごいません。」

御者が馬車の扉を開き、踏み台を用意します。私は御者の手を借りて馬車から降りました。地面に降り立つと両手でドレスをつまんで、出来る限り優雅に一礼しました。

「はじめまして、皆さま。カシート・ナダルの娘、アイナと申しま——」

「いやあ！ よくおいで下さった！」

最後まで言い終わらないうちに、一人の殿方が駆け寄ってきました。逃げる間もなく、私の視界を青い衣が覆います。金糸銀糸で縫い取られた男物の上着です。父以外の殿方に、このように抱きしめられたことなどございませぬ。ので、私は頭の中が真っ白になりました。

「な、何するんですかッ！」

気づいた時には思い切り、その殿方を突き飛ばしておりました。地面に倒れた彼は、何をされたのかわからないというように、きょとんと私を見つめています。

「あなた、アイナ様に失礼ですよ」

そんな声とともに、一人の女性が現れました。年の頃は三十ぐらいでしょうか。長い黒髪を優雅に結び上げた、美しい淑女でございました。

「アイナ様、ようこそおいで下さいました」

彼女は微笑みながら膝を折り、雅やかに挨拶をなさいました。

「私はハナナ。そこで惚けているラータ・ツァピールの妻でございます」

「あ……！」

私は自分がしかした失態に気づきました。今、私が突き飛ばした殿方こそ、十諸侯ツァピ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。